桜ヶ丘だより

発行
岐阜県立関高等学校
同窓会会長大塚暉夫
印刷所
ムトウプリント
電話関2－3155

今、関高は――

同窓会副会長　河合定彦

もう、三十二年も前のことになります。

小学区制が施行され、私たちは、集団見合いを三回程重ねて、武義中から関高校へ嫁入りしました。武儀高女、いわゆる女学校を知っていたのは、小学生のころ、山の上から運動会を見た記憶があるくらいで、まさか、家が近くでも近付かなかった縁のない女の園へ通うことになろうとは……。とにかく御婦人は、おならなんぞに縁があろう筈がないと信じて疑わなかった頃のことですから、その混迷ぶりは、運動場一つをとってみても一事が万事、当時を御存じの諸兄はもちろん、大方想像いただけるものと思います。

校旗も校歌も、満足な教室もなかった私たちにとって、県下でも有数な規模をもつ現在の学校を見ると、喜びと共に何か自分の母校でないような淋しさも感じます。我が子が同窓会の一員になるようになった自分の年令のせいかも知れません。

今や関高は、名実共に中濃地区の名門校とよぶ人がいます。県下が六学区に区分され、美濃ブロック（関市、美濃市、武儀郡、郡上郡、美濃加茂）で、地元新聞の模擬テストを受け、偏差値により上位から関高を受験することになるようですが、毎年、それぞれ百人前後が関高へ入学する関市内の旭ヶ丘、緑ヶ丘両中学校をのぞき、他の中学校からは選抜きの、落ちそうにない生徒が送り込まれます。必然、最後に旭、緑の二校で調整が行なわれる。そんなこんなで、中学生は関高生をエリートとしてながめ、憧れる。そして中学生同士、心の中で軋轢も起きてくる。関高生は、勉強はするかもしれないが、おとなしい、覇気のない、進学校だからこれでも仕方がないかもしれないが、もっと個性が豊かな生徒がでてきても、と聞く。

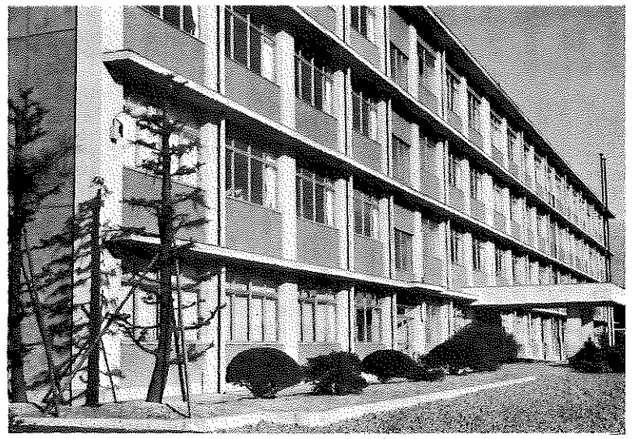
ちなみに、一昨年、市内にある高校の校長と中学PTAとの話し合いがあった。ある高校では、一芸に秀でれば万事に通じるとの考えで、生徒が積極的に参加するクラブ活動を一番大切にしている、と話された。もう一つの高校は関高に追いつき、追い越すのが目標といわれた。関高は、生徒一人一人が毎日、今より一時間余計に勉強してくれたら、当校の目標としている点に近づくのだが……と。

さて、今や関高は……。

（高校三回卒）

＊　＊　＊

関高等学校
同窓会名簿
発売中（残部少々）
送料共 二,三〇〇円



本館前に庭が出来、本郷町旧校庭の樹木も移植

同級生雑感

学校長　小林茂

文芸春秋の始めの方を数頁めくるとグラビアに毎月「同級生交歓」として著名人の並んだ写真が出ている。五～六人以上のことも稀にはあるが、大低は三～四人で、財界・政界やスポーツ・文芸などの分野の一流人物ばかりであり、しかも著名な学校の出身者で揃えている。いかに有名校と言っても世に名を成した人物ばかりではなかろうに、雑誌社も営業である限り無名の人を拾い上げる訳にはいかないのだろうと思う。それでせいぜい三～四人どまりになるのだろう。

そうしてみると、僻むわけではないが、営業を目的としない同窓会は有難い。種々苦労に苦労を重ねて名簿を作り、生きている限り――いや死んでも死亡欄に――一人残らず氏名・住所・職業などを記載してくれる。同窓会に出席さえすれば、記念写真に洩れることも絶対ない。なお、名簿を保険の勧誘やその他営利目的に使用されたとしても、事務局の関与する所ではない。

又同窓会の会合というのが嬉しい。「朋有り遠方より来る、亦楽しからずや」の言葉通りこんな楽しいことはない。受付や部屋に入る時の畏まった挨拶は、ものの数分も経つとすっかりどこかへ行ってしまって、今の地位も身分も忘れて、利害・得失など何等打算的な含みもなく、子供同志の友達と同じように、対等に何の屈託もなく手を取り肩を叩いて話し合える。今どんな服装をしていようと、曽ての制服を着ていたのと同じ友として接し合える。又白髪になっていようと、どんなに禿げ上っていようと、少年少女の頃の顔に見えてくるから妙なものである。

そしてさらに、年令が同じであるから年令に応じた共通の悩みが出て来るのも気楽である。此の頃体がめっきり駄目になったが、ことに脚・腰が弱くなって先日もギックリ腰をやったとか、老眼鏡をかけぬと新聞も読めぬ、歯が悪くなって固い物は食えぬ、頭も老化してきて忘れっぽくて仕方がない、昔のことは覚えていても新しいことは面倒臭くてやる気がしない……等々話のうまが全くよく合うのである。ほんの十年前には誰が何とかの何長になったとか、あそこに立派な店舗を開いたとかの話題で賑わったのに、あの頃のファイトを持っていた奴は一体どうなったのか。宴たけなわになって歌が出ても、みな昔の歌ばかりであって、「今の若い者が歌う歌はどこが良いのか判らぬ」（本当のところは覚えられないのだが）という気持もよく通じ合う。

過日妻が女学校時代の同窓会に行き、その時の写真が送られて来た。私は覗いてみて、「オッ、なかなか年増の美人がいるな」と年甲斐もなく、妻よりも内心美人の方に先に目がいったが、娘は「お婆さんばかりね」と言った。私や娘は写真の人物を当然ながらありのままの今の姿で見る。が、にこにこ見入っている妻にしてみれば、恐らく制服姿の頃と同じような姿・顔に見えて、年を感じさせなかったことだろうと思う。同窓生というのは自分の年令を青春時代へ若返らせてくれる有難いものである。

私は戦中派なので同級生の多くは戦死している。今会う同級生は幸いにして戦死をのがれた生き残りであり、互に数少い貴重な存在なのである。がもう先はそんなに長くもない。従って、生きている限り年老いても、いや老いれば老いるほど、若い頃からの友人を大切にし合って長生きしたいものだと、つくづく思っている。

五月九・十日
米寿記念
中村保個展
関市文化会館

中国を視察して

高校12回卒　伊佐地金嗣

第一回関市日中友交訪問団の一員として、北京と上海の人民政府を公式訪問してまいりました。日中友交を第一の目的とし、四つの都市（北京、天津、西安、上海）の工場、人民公社、農家、少年宮を視察しました。時期は昨年の十一月の中旬の十一日間。長いようで短い訪問旅行でした。

気温は北京あたりでは緯度も高いので、非常な寒さを予想しておりましたが、ほとんど変りありません。ただ、空気がひどく乾燥しており、黄砂現象が見られ、空は薄雲りで、二～三キロ先も見る事ができませんでした。当地の冬は雨も降らず、このようだとの事でした。

おかげでのどをやられ、帰国後も二ヶ月位は風邪をひいたようになり、声も出ませんでした。

日本の五十倍もあり、十億の民が住む国でありますのでほんの一部を視察したにすぎませんでしたが、大変親切な案内者（中国人、視察十一日間同一人）通訳にめぐまれ、いろいろな事に話がはずみ、意義あるものとなりました。

見聞した中で特筆すべき事をならべてみますと――、

サラリーマンの平均月収は七千五百円です。男女共同じで、年令、役職により多少違う程度です。共働きが普通になっています。生活は五～六千円で出来るようです。

物価は日本より少し低いようです。例えば、自転車二万円、トランジスタラジオ一万五千円、白黒テレビ12インチが四万円、タバコ百円、ビール百三十円、ぜいたく品ほど高くなっています。食料の方はまあまあ充足しているようです。

定年制がひかれており、男は六十才、女は五十五才、定年後は八割の年金が支給されます。退職金はありません。定年になったら孫のめんどうを見る事が特に指導されています。医療費はほとんど無料だという事です。

学校教育は五・三・三制で義務教育ではありません。普及教育といって勤勉を特にすすめるという指導をしているとの事です。授業料は若干いります。大学は四年制で無料です。近代化が国策とされ特に教育には熱心です。

又、少年宮が都市にはあり特別教育が学校の授業が終った後、三時から五時まで行われています。これは音楽、テレビの組立て、美術、工芸、卓球、射撃等、三十種目にも及びます。

人口が増えすぎるという事で数年前より非常な産児制限をしております。子供は原則として一人、三人以上は罰金が月に五元（七百五十円）課せられます。

工場は、昼夜三交代で操業している所が多いようで、朝早くから夜遅くまで通勤バス等交通機関は満員で、町には自転車があふれています。失業者はないようです。

職業の自由選択はあまりありません。工業機械展で、NC、機械等、すばらしいのを見せていただきましたが、ほとんど使用していないとの事です。もし合理化をすすめると、一億人も失業者が出るという事です。町の土木工事等も、ほとんど人力、馬車（ダンプの代り）で作業をしています。

広大な中国の国土ですが、田畑はどこまでもよく耕作され、土地改良もされているのが、汽車の窓からよくうかがえます。都市の道路網は整備され、広い並木舗道のある道路が縦横に一直線にのびており、中国の大きさがうかがえます。

以上ほんの思いついた事を書いただけであります。中国も日本とは特に友交の仲間入れしているようで、我々には特別待遇の旅でした。親切で観光地には日本語が話せる案内者がおり、歓迎してくれました。

一つ海をへだてた近い国でありますので、今後も親善を深めていかねばならないと思いました。

上海の街角
トロリーバスと三輪のタクシーが珍らしい

美濃市いづみ荘でダベル会

高女5回卒　深尾光枝

あの日（六月十一日）の感激が今だに尾を引いて、大勢の皆様にお目にかゝれて本当に嬉しうございました。

多賀、柴山両先生を始め四十二名の参会を得て、梅雨を心配しましたが恵まれた好天で爽やかな風が渓谷の緑を渡って私共を心よく迎えてくれました。女学校時代の心に返って賑やかな声が辺りに響いてべちゃくちゃだべりました。司会の挨拶もできない程。近藤さんの、

「ようこそ、こんなに大勢お越し下さって誠に有難うございました。」と涙が溢れて次の言葉が出ない程。皆しんと静かになって……。

次に多賀先生の御挨拶があり、誰が話し出すでもなく話に花が咲いて先生の御挨拶も聞き取れない位、五十年目に始めて来たと言う人も五～六人もあり誰だか解からない程変っている人もあって自己紹介をする事になった。

中でも一番驚いたのは柴山先生の若々しさ。私達よりも十才もお若く見える。知識を求め意欲に燃えた生活をしていらっしゃる為で理知的な美しいお顔に感服しました。八十何才になっても政治活動をなさる市川女史など、私共も何か人のお役に立たねばと勇気づけられました。体が不自由で右眼失明の私が皆様にお介をする事でした。

十何才になっても政治活動をなさる市川女史など、私共も何か人のお役に立たねばと勇気づけられました。体が不自由で右眼失明の私が皆様にお目にかゝれて本当に嬉しうございました。

多賀、柴山両先生を始め四十二名の参会を得て、梅雨を心配しましたが恵まれた好天で爽やかな風が渓谷の緑を渡って私共を心よく迎えてくれました。女学校時代の心に返って賑やかな声が辺りに響いてべちゃくちゃだべりました。司会の挨拶もできない程。近藤さんの、

「ようこそ、こんなに大勢お越し下さって誠に有難うございました。」と涙が溢れて次の言葉が出ない程。皆しんと静かになって……。

制服の昔に戻った同窓会

高校22回卒　小西輝幸

お盆も終りの八月十七日に、我々関高校二十二回（四十五年三月）卒業生の同窓会を開催しました。卒業後十年が、あっという間に過ぎ、やっと一昔たって開催することができました。先生方も堀江・加藤・中島・坂田各先生が出席して下さり、六十名が集まりました。

十一時に関高校へ集合。懐かしい木造校舎は、今は鉄筋コンクリートになっていました。そこで自己紹介をしてもらい、昔へ一歩もどってもらいました。なかには、名前を聞いて、「あの○○さん。」という声が、あちこちから聞こえてくる事が多々ありました。思ったより男性、女性ともに、独身の人が多く、胸をなでおろしていたのではないかと思います。先生方にも、我々が在学当時の想い出ばなしをしてもらい、その後、バスで小瀬の篝火荘へ。

篝火荘では、まるっきり制服時代へもどり、にぎやかそのもの。昔の想い出に花を咲かせ、今の様子を話し合っていたようです。写真はどんどん撮り、アルコールは次から次へと運ばれてくるし、しまいには、再度男性から会費を集めて、追加したぐらいです。

まったく想像以上に盛り上がりました。よく飲んだ、話した、ねころんだの三拍子がそろった、楽しい同窓会でした。

ところが、盛り上がりすぎて、ここだけではおさまらず、三十名程は二次会へと、同級生に無理を言って、魚国へどやどやとおしかける始末。ここへも先生を引っぱり出し、又、飲み直し。そして、カラオケまで出る始末。のりにのった同窓会でした。

「同窓生の紳士・淑女の皆さん、また一昔たったら再会しよう。」、この約束をかわし、おひらきとしました。出席されなかった人へ、ありがとう。出席出来なかった人は、次回は是非出席して下さい。おもろいで！。最後に先生方、本当にありがとうございました。ではまた。

活躍してます!!
―恩師・OB・OG―

〈中村保先生〉
昨年度の高令者の富士登山者番付（七〇才以上）で七三五名中から見事関脇の座に推薦され、記念章を授けられました。老いて益々盛んな88才。

〈佐藤益子さん〉
読書好きな目の不自由な人の為の〝声の図書作り〟の奉仕活動を六年間に亘り続けておられ、昨年秋に名古屋市で表彰されました。関市在住で「関朗読グループ」38名の代表者。高女20回卒。

〈坂田誠有さん〉
国体冬季大会のスキー競技に、今年で三年連続出場し、初出場で4位。関高時代は柔道部でインタハイ、国体に数回出場し、現在は五段。郡上郡大和村在住。高校9回卒。

〈松井勲さん〉
昨年、一昨年と全日本柔道の三位、カナダ国際柔道大会で優勝と、このところメキメキ力をつけて来ました。〝打倒山下〟の一番手。現在筑波大学大学院在学。高校27回卒。

『愛国心』『愛校心』

服部竹風先生

ナポレオンがセントヘレナの孤島に敗残の身を横たえて、朝夕夢を見たのは、かつて花やかなりしパリーの豪華なサロンではなくて、波さわぐ故郷のコルシカの寒村であったにちがいない。

私たちの人生において、最も気力のすぐれ多感なりし青春の三ヶ年、共に学び、共に遊んだ高校時代の想い出は、生涯の中で一番なつかしいものであろう。しかも紫匂う南の田原の山なみが、明るくあけ行く春の朝、枯葉ことごとく落ちつくした雑木林に霜柱をふむ靴のしめりを感ずる時、何の鳥か声高く飛び立つ鋳物師屋道の初冬の夕。まして丈余の夏草の茂みに雑木の根を掘り、炭ガラを運んだ運動場には、私たちの汗がした、り落ちて土ににじんでいるのである。

校庭の東に倒すのを惜しんだ大樹は今もあるであろうか。共に将来を話り合って憩いの場であった藤棚は今もなお五月には紫の花房を垂らして咲くであろうか。

私の個人のことをいえば、思わざりし敗戦により、焦土の故国に復員して、家を失い肉身を亡くし、しかも教壇復帰の出来なかった三十七才の身が、思わざる因縁により、この学校に拾われて、往復四時間の通勤も、実に苦しい中にも、また今にして思えば楽しい事だけが去来し、常に誇らしく思うことは、教師として、人間として、誠にとるに足らない存在であったが、十七年間一日も欠勤した事がなかったということである。

それよりも思い出の深いことは十七年前、ロング・ホームルームに「愛国心」についての授業を県の指導課をはじめ多数の参観者を迎えて行ったことである。

世界で一番愛国心が強い国民といわれた、わが国民が、終戦後、民主主義とか個人主義とかが横行する時代となり、愛国心など口にするのは、かつての軍国主義、侵略戦争の亡霊であると一笑された時代である。

学級の討論は、今一息の盛り上りがなくて、不発に終った感があったが、結論として、「越鳥は南の鳥であるから、故郷を偲ぶかの如く南の枝に巣を作る。胡馬は北の馬であるから北風が吹くと、故郷を思い出して、いななく。」という。私たちが如何なる事態におかれようとも、生れた日本、育った日本を愛する心は天性のものであろう。日本を愛することは郷土を愛することに始まり、郷土を愛する事は、わが母校を愛することより始まると結んだ。

＊　＊　＊

その後、退職してすでに十年。いつしか老醜の身となったが、月々三種の小冊子を発行して、禿筆を呵して、いささか老をもって拙を補っている。時に物好きな方が引っ張り出して、講演させられる事がある。この頃中も、こんなお便り戴きましてありがたく存じます。

七五三のお孫さんと共に
— 服部竹風先生 —

恩師拝謁

恩師 鈴木輝雄先生を偲んで

高校4回卒　T・S生

関高校柔道部生みの親、鈴木輝雄先生が本校に赴任されたのは、昭和二十五年四月だったと思います。当時は困難な情勢にも拘らず、早々に柔道部を創設されました。

当時、今日の様な立派な武道館はもちろん校内で練習する場所もありません。そこで、警察の道場を拝借し稽古したと思い出があります。翌年より高校柔道大会も復活し、私達部員も健闘しましたが、二回戦で敗退してしまいました。そこで、先生は五年計画で関高柔道部を県下の大会で優勝させるのだと目標を立てられ、生徒諸君にハッパを掛け指導に専念された結果、目標通り五年目にして初めて優勝の感激を味ったのであります。その後は県下に敵なしと云われる程強くなり、全国大会連続出場の名門校に育成された業績は誠に大なるものがあります。

ある日OB諸君が集り先生の業績をたゝえると共に、ここまで築き上げた関高柔道部の名声を守り抜く為にも先生一人にまかせずOB達も協力し技術指導及び金銭的な援助をしようと立ち上がり、昭和三十八年に関高校柔道部OB会を結成したのであります。

毎年一月二日に先生をお迎えし、母校の武道館に集り、後輩達と練習し試合した後、懇親会を行うのが恒例になっております。今後も関高柔道部が存続するかぎり続けていきたいと思っております。

先生は高校退職後、中京大学、岐阜大学、中部柔整の講師として大学柔道の振興に尽され、又、スポーツ少年団の講師をしています。現在のところ元気です。関校の校舎をながめながら長良川の上流に釣りに行くときがもっとも楽しいときです。

茂野聖剛先生

（在任　昭26～33）

岐阜市加納西丸町一―七四

教員生活三十二年。よくもここまで勤めたという感慨無量なものがあります。緑ヶ丘中から関高に移り本格的な教員生活が始り、爾後武義高を経て特殊教育に取り組み、関養護学校（肢体不自由児）―恵那養護（病虚弱児）―岐阜聾学校（聴覚障害児）と障害児の教育に微力を尽してきました。思い出はつきませんが、その間関養校時代の二ヵ年は関高時代に七年間生活をともにしご指導をいただいた国光先生の校長のもとで教頭としてお仕えしたことは宿縁を感じ、本当に幸せでした。三月末に停年、残余の三十日を悔いのない充実した日々にしたいと意を新にしています。

高橋俊示先生

（在任　昭28～31）

揖斐郡久瀬村西津汲

昨年は三年有余かかりました角川書店の「日本地名大辞典岐阜県編」が、百数十名の協力で完成発行を見ました。責任の一端を持ちましたものとして、肩の荷が一つおりました。また一部を執筆した、「根尾村史」も、やはり昨年の終りごろ出版されました。只今は藤橋村史の執筆と、春日村史執筆の構想を練っているところです。今年は何としても両村史の出版に漕ぎつけねばなりませんので、病気などしないよう老骨に鞭打っているところです。昨年は前校長佐合さんにつれていって貰って、立派になった関高の偉容を見せて貰い、新校長の小林さんに学校経営の抱負を聞いて嬉しくてならず、桜ヶ丘に移転間もなかった私の赴任当時のことを回想して、今昔の感ひとしおでした。関高ならびに関高同窓会の発展を、心からお祈りいたします。

松原功績先生

（在任　昭29～35）

美濃加茂市古井町神明西二

同窓会からのお便りをいただいて、ほんとうになつかしく思いました。私が在職したのは二十数年前のことでありますが、その当時のことが次から次へといろ〳〵思い出されて来ます。K君は今何をしているだろうか、A子さんは何処へお嫁に行ったろうか、そして又N先生は……、と限りがありません。時々いろいろな場で皆さんに会うこともありますが、皆さんの方から呼びかけられないとさっぱりわからないのが常であります。私は当時太田から越美南線で通っていました。当時は現在のように自動車で通勤するなんてことは想像もしなかったことでありましたがどうですか今は殆んど車で通勤であります。それ程二十年の間には

はげしい世の変遷がありました。今后二十年にはどんな変り方が私たちの周りに、日本に、世界に現れて来ることでしょうか。皆さんの健康を祈ります。

松波重明先生

（在任　昭31～36）

岐阜市加納矢場町一の十一

同窓会の皆様には絶えてご無沙汰致しており、真に申訳ありません。私は昭和三十一年から三十六年迄の丸五ヶ年関高に在任しておりましたが、爾来早や二十年以上、当時の卒業生の皆様は既に四十才前後のお年になられ、社会の中堅として各方面にご活躍のことを思い喜ばしく思います。私の当時の思い出は数々ありますが、中でも理科教室一棟の建築、併設されていた農業科の廃止、恐ろしかった伊勢湾台風のことなどは今も忘れ得ません。

私は齢既に七十七才となりました。三年程ばかり前にトラックにはねられ、瀕死の重傷を負いながら辛うじて一命をとり止めましたが、今も尚後遺症に日夜悩まされています。

同窓生各位のご健祥を心から祈ります。

柔道部と鈴木先生の思い出

高校11回卒　遠藤正人

私の初めての柔道との出会いは、故鈴木輝雄先生が昭和二十八年に鈴木道場を安桜山に作られ、古田弘さん、河村俊之さんと入門した時です。

当時はまだ日本中が物資不足の時で、柔道着も入手困難な頃でした。プロレスが初めて興業され、力道山の試合を道場の帰りに電気店のテレビで見たものです。食生活も悪く、みそ汁とつけ物のみの食事で毎日よく練習できたものだと思います。

昭和二十九年、中学二年の時に、初めて美濃町の少年チームと試合があり、鈴木道場が全勝しました。思えばこの試合が私の初めての対外試合で、その後、柔道、空手道と二十数年間よくやって来れたと思います。

昨年は四十才で空手道の全国大会に優勝出来、その感激もひとしおでした。

昭和三十年には兼松興一君板津勉君、塚原敏君が入門して来ました。又、後輩として加藤武、加藤憲司、上野広夫、大平、武藤、武田君達も鈴木道場にいました。

昭和三十一年関高に入学。兼松、板津、塚原、井戸、相宮、兼村君等、鈴木道場の仲間が入部しました。三年生の宮川治さんが主将でしたが、二年生の古田弘さんが厳しくて、私達一年の部員は毎日ビンタをとられました。

鈴木先生は当時五十才で頭を丸刈りにされ、関高が県大会で優勝するまでは髪を伸ばさない決心でおられました。練習は正月元旦から、夏休み、冬休みも一日の休みもなく、修学旅行にも行かずに三年間続けました。この厳しい練習の甲斐あって、昭和三十二年に初めて県大会など全ての大会に優勝しました。

これが伝統となり、その後八年間県内で全て優勝、全国大会も16回出場し全国最多出場校となりました。

鈴木先生の言葉で印象に残っているのは、県大会で優勝の時、選手全員がブンなぐられ、「県の優勝位で慢心するな。全国大会で優勝しろ」と云われたのと、「試合で負けて泣くより練習で泣け」と常々言われていた言葉です。

青春の一時代に、このように厳しい先生や先輩達の指導を受け、苦しく辛かった事も今では大変楽しく懐かしい思い出となり、有意義な青春だったと思っております。

君及びかつての教え子達の付き切りの看病もむなしく、四月二十日逝去されました。

そこで、先生の業績をたゝえ遺徳を継承するため、知人、教え子が集り、故人の一周忌を記念し、胸像を建立することも決定しております。

みつき七人を捕えて村中へ拉致して気勢をあげた。幕府も藩もいよいよ決断にせまられた。時にイギリスが仲裁に入って、ロシア艦隊は退去したのである。

現在、ようやく「北方領土を返せ」と声を大にして云い得るまでに到った。憲法改正、徴兵制も論ぜられる時代となった。今にして、たゞノスタルジヤの郷土をなつかしむ心、思い出の母校愛が、われわれの生れた、育った日本を自分の手で守るという心に成長させねばならない。

話をした。

文久三年（一八六一）二月三日、ロシア軍艦が対馬にやって来て、木材、水、遊女を提供せよと迫った。幕府も馬藩もなす所を知らず、たゞ傍観するのみであった。時に島民は奮起して、侵略の一隊が海岸に近づくや、身に寸鉄を帯びない島民が一列に砂浜に座りこんでこれを押し止めようとした。時に漁民の安五郎という若者が、勇敢にも立ち上って、ボートに躍り込んだ。その瞬間この勇士は、ピストルで狙撃されて倒れた。島民は老いも若きも一斉に立ち上った。素手で異人にしがみつき七人を捕えて村中へ拉致して気勢をあげた。幕府も藩もいよいよ決断にせまられた。時にイギリスが仲裁に入って、ロシア艦隊は退去したのである。

現在、ようやく「北方領土を返せ」と声を大にして云い得るまでに到った。憲法改正、徴兵制も論ぜられる時代となった。今にして、たゞノスタルジヤの郷土をなつかしむ心、思い出の母校愛が、われわれの生れた、育った日本を自分の手で守るという心に成長させねばならない。

結成など幅広い分野で活躍され、先生の指導を受けた門下生は千人余にも達します。かくして、先生の多彩な足跡は高く評価され、勲五等双光旭日章の栄光に浴されました。

しかし、昨年三月二十日突然脳出血で倒れられ、OB諸君及びかつての教え子達の付き切りの看病もむなしく、四月二十日逝去されました。

そこで、先生の業績をたゝえ遺徳を継承するため、知人、教え子が集り、故人の一周忌を記念し、胸像を建立することも決定しております。

『恩師短信』

本号より、懐しい恩師の先生方の短信を掲載いたします。

佐藤（神代）正枝先生

（在任　昭和4～8）

東京都大田区中央四―一四―一二

同窓会だよりいつも嬉しく拝見し幹部の方々のお骨折を感謝して居りました。私にとりましては故郷同様の関市、私の青春を色濃く豊かなものにして下さいました関校を忘れる事が出来ません。東京及び周辺の同窓会員にお目にかかれる事を期待し、又地方の皆様からの温いお便りをお待ちして居ります。

若い頃生徒達と一緒に運動場を跳び廻ったり、山越えの遠足をしたりしたのが幸いしていると思いますが、大変健康に恵まれまして、俳句、詩吟、万葉研究などに取組み、楽しい日日を送って居ります。一度訪れて五十年前の関町の名残をどこかに見つけたいと思って居ります。御校の発展を心からお祈り致します。

花田弥郎先生

（在任　昭7～17及び19～21）

福岡県筑紫郡大宰府町榎寺四四

今冬は、当地方も近年稀な寒さで雪も多く、春の訪れる日が待たれます。しかし、少々遅れても早咲の天満宮の飛梅がちらほら咲き初めたとか花便りを聞けば、何やら気分も明るくなる昨今です。籠りがちの日々ですが、どうにか平凡無事に過しております。この度「同窓会だより」に近況をとのことで筆不精のペンをとりました。

この地、太宰府町榎寺は菅公が二年蟄居の地で、私宅は館趾（小祠あり）のほとり。昭和三十年以来四DKの兎小屋で今日に至っております。当初の五人家族も四十八年末子が転出してからは二人暮しとなりました。関で生まれあるいは育った五人の子供（五十三才～三十八才）は、各地に分れて住み、昨年は名古屋・鎌倉・横浜・北九州・鹿児島と全家族を一巡しました。孫は大学生から二才の幼児まで、息子二人、娘七人。私は昨秋年を重ねて八十二才になりました。老人の集まりでも八十を越した人は少く、いやでも高齢者の仲間に入ったかなあと感じさせられます。四十七年秋胃を病んで入院加療二ヶ月、その後ずっと完全咀嚼を励行して好調です。酒は一ヶ月に一本煙草は一週間一箱で足りる程度。四十八年に韓国旅行（慶州・扶餘・ソウル）四十九年日本一周の船で、本州・北海道周遊、近年は老人大学、同大学院など開設され、又趣味教養の講座も多く、余暇活用の為努めて利用しています。地元の老人クラブのお世話も十年来の役目になりました。

先年、中村先生と明子さん父娘、一両年来、長谷川さん（十三回）石田さん（十六回旧姓井上）など御西下、久々にお会いして、ほんとうに嬉しく幸せに存じました。

皆さん、どうぞ九州へおいでください。一度はぜひ御来遊お進めします。

皆様方のお幸せをお祈り申し上げます。

＊　＊　＊

平田省三先生

（在任　昭25～30）

岐阜市雲井町二丁目四番地

私は昭和二五年三月（二四才）大学を卒業し、その四月から英語の教師となり、五年間お世話になりました。なにしろこれが私の社会生活の第一歩であり、また生徒諸君と年令も余り変らず、毎日が愉快でたまりませんでした。当時教科書に出ていたハメルンのパイド・パイパーや慾張りのパホム（私は一時そう呼ばれていた）の話、アーヴィングの「ザ・ワイフ」、ラムの「レヴァリー」（夢幻）など、今も記憶に残っております。懐しく想い出して下さる方もあるかと思います。

昭和三二年四月から弁護士を開業し、主に民事事件を取り扱って現在に至っておりますが、随分神経を使う仕事です。しかし二十数年たった今なお当時の先生方や生徒諸君からお誘いがあり、有難いことと思っております。現在長女は金城大学英米文学科四年で卒業後は中学英語教師に就職が内定、長男は東大法学部二年、次女は加納高一年、妻は書と画に凝っております。「根尾村史」も、やはり昨年再会を楽しみにしております。